2 つの「裸婦」を比べてみよう!

ARTIZON MUSEUM

Q1. それぞれの作品の女の人はどこで何をしているのかな? また、どんな気持ちかな?

	で、 をしているよ。		で、 をしているよ
	 意も 気持ちは、 □ ※ □ かな □ 悲しい □ はずかしい □ その他(気持ちは、 ※しい □ つまらない □ しあわせい 悲しい □ はずかしい □ その他 ()
ピエール=オーギュスト・ルノワール	《すわる水浴の女》1914年	アンリ・マティス《画室の裸婦》189	99靠

Q2. 絵の具のぬり方に注目して、筆の動かし方を想像して真似してみよう!

展示室ではえんぴつを使ってね。おうちでは絵の具やクレヨンなど自由に使ってみよう。



|--|

Q3. 2つの絵の似ているところはどこでしょう?そして、ちがうところはどこでしょう?

似ているところ _____

ちがうところ



ピエール=オーギュスト・ルノワール 1841-1919

フランス中西部の町に生まれ、13歳で磁器の絵付け職人になりますが、その後画家になることを決意します。20歳頃、パリの画塾でモネやシスレーらと出会い、印象派の活動に参加します。画業の前半は、戸外の明るい光に包まれた都市や郊外の人々を多く描き、肖像画家として成功を収めました。晩年に最も熱心に取り組んだ主題が「裸婦」です。1880年代初めのイタリア旅行をきっかけに、はっきりした輪郭線と肉付きの良い、それまでよりもどっしりとした表現を目指すようになります。次第に、より丸みを帯びた柔らかいタッチの豊かなバラ色の肌の裸婦像が確立されます。1914年の《すわる水浴の女》は、ルノワールの印象派時代の明るい光に満ちた色彩と、後のしっかりしたデッサンが組み合わされた、晩年の特徴がよく分かる作品です。



アンリ・マティス 1869-1954

北フランスの小さな町の出身のマティスは、両親に従い法律を学んでいましたが、20歳で画家の道を選び 1891 年にパリの画塾で学び始めます。周りの画家たちよりも遅いスタートでしたが、当時のパリは印象派以降の新しい芸術運動が展開しており、彼はそれを次々に吸収していきました。1898 年、シニャックが新印象主義の理論をまとめた内容が雑誌に掲載され、翌年本として出版されました。1899 年の《画室の裸婦》は、その手法を試した作品です。新印象主義の点描は、絵具を混ぜずに原色を細かく配置することで明るく、調和のとれた画面を目指しました。一方、マティスは大きなタッチで不規則に色を置き、赤と緑というコントラストが際立つ大胆な色使いです。また、アトリエにおける画家とモデルという主題は、彼が繰り返し描いたものの一つです。



(参考) 百武兼行《臥裸婦》1881年頃

「ヌード」と「はだか」: 絵画にはどうして裸の女性が多く描かれているのだろう?

美術館で裸の女性を描いた作品が多いことを疑問に思ったことはありませんか?

その理由は、古代ギリシア以降の西洋の芸術が理想的な身体像を追求してきたことに加え、その後の芸術の仕組み全体に問題があります。美術 史家ケネス・クラーク(1903-1983)は、「ヌード (nude)」と「はだか (naked)」を区別し、「ヌード」は整っていて自信に満ちた肉体で あるのに対し、「はだか」は着物がはぎ取られた無防備な状態であると定義しています。19世紀頃までは、男性、女性を問わず人間の「はだか」 をいかに理想化された「ヌード」として表現するかということが芸術の常識でした。

そして、ルネサンスから 19 世紀にかけて絵画のジャンルの中で最も格が高いとされたのは、歴史的出来事や神話、宗教的な主題を扱った「歴

史画」でした。なぜなら、絵の注文主である教会や王侯貴族の偉大さを表すことが出来るからです。肖像画や風景画、静物画は、神話の女神や歴史上のヒーローを描いた作品の下とされていました。公的な美術学校で画家を目指す若者たちは一流の画家として認められるために、まずは歴史画を描くときに必要な物語と、人体を正確に描くためのヌードデッサンを学びました。百武兼行(1842-1884)のように洋画を学ぶ日本の画家たちも西洋のやり方に習って、理想化されたヌードを描いています。しかし、この頃フランスや他のヨーロッパの国々、西洋を真似した戦前の日本でも、歴史画のような立派な芸術の制作には男性がふさわしく、女性は向いていないとされ、公的な美術学校への入学が許されませんでした。ヌードを描く勉強から女性を閉め出したことは、女性が芸術家になることを難しくしました。

19世紀末頃から、身の回りの生活に基づいた親しみある「はだか」を描くことが探求されます。そして、画家たちは女性の「はだか」を描くことで自らの新しさを試すようになっていき、男性の「はだか」を描いた作品は少なくなっていきます。ルノワール《すわる水浴の女》もマティス《画室の裸婦》も、裸婦によってそれぞれ男性画家の独自のスタイルが表現されています。このように、男性芸術家が裸婦を描く一方で、女性芸術家が少ないという事実については1970年代から多く批判されています。裸の女性を描いた作品の背景から、美術の歴史の中で「男性」と「女性」の二つの性別によって分けられた役割という、不公平な仕組みが存在していたことが分かります。